

モノグラフ研究と 生活史研究をめぐって

玉野和志

東京都立大学大学院人文科学研究科 教授

かつて、佐藤郁哉さんが学会のシンポジウムか何かで、海外からやってきた研究者が日本でエスノグラフィックなモノグラフ研究をしようとしたとき、十分なサポートを受けることができなかったという話から、日本には質的調査にもとづく事例研究が学術研究として認められる素地が少なくと述べたことがあった。現在ではそのような評価に首肯する人は少ないかもしれないが、30年近く前には確かにそういうところがあった。有賀喜左衛門の『日本家族制度と小作制度』に代表されるような、冗長なくらいに事例を並べた詳細なモノグラフは何とか認められたとしても、『ストリート・コーナー・ソサエティ』のような読みやすいモノグラフは、学術研究として認められにくいところがあったのだ。事実、その頃までの日本社会を描いたモノグラフには、ドーアの『都市の日本人』やエンブリーの『須恵村』など、外国人が書いたものしか見当たらなかった。

そんな背景があるので、日本人の書いた質的研究には『ストリート・コーナー・ソサエティ』ほどの色気がなく、ドックやチックではない、太郎さんと花子さんのモノグラフは存在しないというのが、佐藤さんの主張であった。

私は若い頃にこの話を聞いて、いつかは太郎さんと花子さんのモノグラフを書きたいと思ったものである。私の書いた『東京のローカル・コミュニティ』がそうなっているかはさておき、前置きが長くなったが、そんな思いで読んだホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』が、私に取り上げる最初の1冊である。

身近な現実から大きな社会を描く

『ストリート・コーナー・ソサエティ』

W.F. ホワイト 著 (奥田道大, 有里典三訳)

有斐閣 2000

いうまでもなく、モノグラフ研究の定番中の定番である。しかしよく読んでみると、中身が評判とはかなり異なることに気がつく。当時、ホマンズな

どは前半のボウリングの場面をあげて、小集団分析として優れている点を評価していた。街角の若者たちの序列が、ボウリングの点数に忠実に表れているという発見である。このように『ストリート・コーナー・ソサエティ』は小集団研究として評価されるのが一般的だが、私は圧倒的に後半の方がおもしろいと思った。後半で著者のホワイトは街角の若者たちから離れて、ヤクザの賭博組織やこれと絡む警察組織へと目を向ける。そして、チックのようにアメリカンドリームをめざして、エスニックなコミュニティから抜け出そうとする若者をセツルメントハウスは支援したとしても、ドックのように仲間内からの信頼が厚く、地元に残まろうとする人物にはあまり支援しようとしめないという現実を描いていく。

このことから私は、モノグラフは身近な現実の中にある具体的な事実から、より大きな組織や社会との関連を描いて初めて価値があると考えようになった。この点はすでに他で詳述しているので(「魅力あるモノグラフを書くために」好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』所収)、ここではこれくらいにしておく。

心揺さぶられるモノグラフ

『日鋼室蘭争議三〇年後の証言』

鎌田哲宏・鎌田とし子 著

御茶の水書房 1993

ところで、佐藤さんが冒頭のような発言をしたときに、ひとつだけ色っぽい日本人によるモノグラフとして思いついた作品があった。それが、鎌田哲宏・とし子の『日鋼室蘭争議三〇年後の証言』である。これは労働運動の歴史の中ではよく知られた1954年の日本製鋼所室蘭製作所で起こった労働争議に関する当事者たちの証言を集めたものである。それ以降、三井三池の争議に至るまで定番の戦略となる、第二組合設立による労働者の分断という手法が経営側によって用いられた争議である。

鎌田哲宏・とし子は第一組合に踏みとどまった



労働者を中心にその証言を重ねていく。第一組合に残った労働者の多くは、必ずしも思想的に堅牢な人だったわけではない。素朴で目端が利かず、ただ仲間を裏切りたくないという一心の人が多かった。労働者の連帯の基盤がどこにあるかをよく示した叙述であり、第二組合の中心人物に行ったインタビュー場面についての全般的な描写が、その人物の聡明さと先が読める頭の回転の速さを感じさせるものになっているのと対照的である。「(一組に残った結果) 本当に貧乏なんです。なのに、『俺は最後まで仲間を裏切らなかった』と胸を張ってるんです。そんな人の記録を残さなければいけないと思ったんです」と、後に鎌田とし子本人から、筆者はその思いを直接聞く僥倖に浴することになった。

生活史研究の金字塔

『天草の女』(色川大吉編『水俣の啓示 下』所収)
角田豊子 著
筑摩書房 1983

私は自分なりのモノグラフを書き上げる過程で、一時期生活史の聞き取り調査を行った。ありきたりのインタビューでは、それぞれの人がとった態度の違いが、どうしても説明できなかつたので、根こそぎ生活史を聞くしかないと思ったのである。当時、中野卓の『口述の生活史』が話題となり、若手研究者がしきりに生活史法について論じていた頃である。方法論的に論じる人は多かったが、実際に聞き取りをする人は少なかった。私も最初は逡巡して、他の人に頼もうとしたが、断られたので、仕方なく自分ですることにした。やってみるとそれほど大変ではなかったが、それでも時間はかかった。いまふりかえると、一番調査らしい調査をしていた時期かもしれない。

そんなとき、私は中野卓の生活史研究に大きな疑問を抱くようになった。中野はただ聞いてきたことを書くだけで、いっこうにそれを解釈しようとはしないのだ。『口述の生活史』が大きな成功を取めたのは、へたな解説をしなかったからだとも思うが、しかし、社会学の研究としてどうかという疑問は残った。中野自身は『商家同族団の研究』においてすでに生活史の方法を使っている、そのときは家制度との関係でそれを扱っていたのに、『口



述の生活史』以降は社会構造との関連にはいっさい触れなくなる。

そんなときに出会ったのが、最後に紹介したい角田豊子の「天草の女」である。これは色川大吉編の名著『水俣の啓示』所収の論文なので、「私の3冊」の企画にはふさわしくないかもしれないが、ぜひとも社会調査を志す人には読んでもらいたいのである。

角田は、水俣病に冒され、ひっそりと一人で暮らし、周りからはあれこれと悪く言われるシヅおばあさんを、ためらいながらも訪ね、その壮絶な生活史を聞き取っていく。戦中に中国大陆に渡り、戦後帰国する経緯は、『口述の生活史』の松代おばあさんとよく似ているが、中野があくまで話者の言葉だけを連ねるのにたいして、「私は戦争について何も知らなかった」という角田は、中国大陆で起こったことを調べて補いながら、あまり語りたがらないシヅおばあさんの言葉の断片を読み解いていく。そして、シヅおばあさんが従軍慰安婦を世話する「移動料亭」のお女将さんであったことを明らかにしていく。シヅおばあさんが水俣病に冒され、人に悪く言われながらも、ひっそりと暮らしているのは、この過去への贖罪を抱えてのことだったのだ。

個人の個性ある生活の歴史をどうしようもなく枠づけている社会の構造を、たとえ無粋であっても描こうとするのが社会学者の仕事ではないのか。ちなみに、角田豊子は地元の高校教諭で、誰もこの論文が『口述の生活史』をはるかに凌駕する生活史研究の範例とは思わないだろう。それでも、これはまぎれもなく「私の1冊」であり、宮本常一の「土佐源氏」にも匹敵する作品なのである。